

令和6年6月14日

松阪市議会議長 坂口 秀夫 様

松阪市議会議会 蒼水会  
代表 沖 和哉

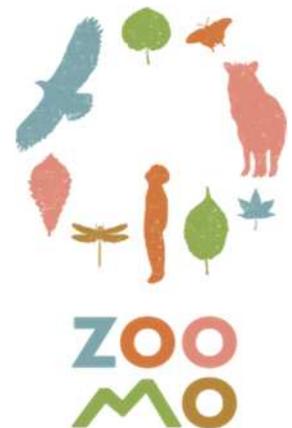
令和6年5月29日(水)から31日(金)の3日間、  
先進地視察研修を実施いたしましたので、下記のとおり報告いたします。

## 蒼水会 視察研修報告書



**IKE・SUN  
PARK**

イケ・サンパーク



- 日 時**
- ① 令和6年5月29日(水)14:00~16:00
  - ② 令和6年5月30日(木)14:00~16:00
  - ③ 令和6年5月31日(金)10:00~12:00

**視 察 先** 東京都豊島区、秋田県美郷町、岩手県盛岡市

- テ ー マ**
- 1 パークPFIによる防災公園「イケ・サンパーク」整備と運用について
  - 2 株式会社モンベルとの連携とアウトドア観光施策推進について
  - 3 盛岡市動物公園 ZOOMO の民間委託運営とフリースクール設置について

**参 加 者** 沖 和哉、濱口 高志、赤塚 かおり、野呂 一平 以上 4名

## 1. パーク PFI を活用した防災公園の整備と運用

ご対応者:東京都豊島区 都市整備部公園緑地課長 片山 裕貴 様

東京都豊島区 都市整備部公園緑地課公園活用グループ係長 小俣 哲 様

### 1. 豊島区について

#### 概要

人口 308,458 人 面積 13.01km<sup>2</sup>

東京都の区部北西部に位置する特別区。都内有数の繁華街の1つである池袋などを擁する。北は板橋区と北区、東は文京区、南は新宿区、西は中野区と練馬区に接する。立教大学、学習院大学、川村学園女子大学、東京音楽大学、東京国際大学といった大学キャンパス、「おばあちゃんの原宿」として知られる巣鴨、高級住宅街・文教エリアの目白などがある

### 2. パーク PFI による防災公園整備と運用について

#### (1)としまみどりの防災公園(イケ・サンパーク)の特徴:

- ・広大な芝生広場や季節を彩るサクラやイチヨウがあり、火災の延焼を防ぐためのシラカシによる防火樹林帯も整備されている。
- ・災害時には備蓄倉庫や非常用トイレ、ヘリポートなどが機能する。トイレは公園内にある井戸の水を使用することにより、水道が断水しても使用できるようになっている。



防災用水洗トイレ



公園内の井戸



- ・園内でファーマーズマーケットが毎週末開催され、旬の野菜や果物を直接農家から購入できる。
- ・ペット同伴で公園内のカフェも利用できる。

#### (2)としまみどりの防災公園の歴史

旧造幣局東京支局の周辺は木造住宅の密集地であり、豊島区町会連合会では 1984 年より跡地を防災公園として活用することを要望していた。2013 年に造幣局の移転が決定したため、2015 年に、豊島区はこれまでも区内の防災公園整備の実績のある都市再生機構(UR)と基本協定書を締結し、跡地 3.2 ヘクタールのうち 1.7 ヘクタールにはとしまみどりの防災公園、残りの土地の 2/3 は東京国際大学のキャンパスに活用し、1/3 は暫定施設として「としまキッズパーク」を整備。



東京国際大学



としまキッズパーク

### (3)パーク PFI の活用

防災公園建設の資金調達に、パーク PFI 方式を活用した。2019年5月より防災公園の工事が始まり、2020年7月11日に部分開園。同年12月12日に全面オープンした。としまキッズパークは2020年9月26日に開園し、同日より、池袋駅周辺を巡回する電気バス「IKEBUS」が本園とキッズパークとの間のプロムナードに乗り入れを開始した。キッズパークは鉄道デザイナーの水戸岡鋭治先生のデザインで、電気機関車が大人気で年間12万人が来場している。



公園整備はプロポーザル方式で4社が参加し業者選定をしていたところで、パークPFIという新しい

制度ができたため、この制度に乗り換え事業化を進めた。従来の制度では公園面積の2%しか建物を建てられないが、パークPFIでは建ぺい率が10%上乘せされ、公園面積の12%まで建物を建てることのできる。また運用期間も10年から20年に延長できる。

さらに選定した業者から5400万円投資してもらいウッドデッキ等も整備し、巨大なテラスを持つカフェ「EAT GOOD PLACE」を作った。テラス部分はペット同伴可能である。運営業者は投資した5400万円をカフェの売り上げで回収している。



また、KOTO-PORTという小型店舗の飲食もある。これはトレーラーハウスのように車輪、ナンバープレートが付いており、建ぺい率には含まれない。区内事業者を募集し、入居料(家賃)収入も事業費に組み込まれる。スタートアップには最適である。



### 3. 所感

この地区は低層の木造住宅が密集しており、火災が発生すると延焼により大規模災害になる危険が高い。このため住民は防災公園を欲しており、造幣局跡地を公園として利用するため、区民の2/3にあたる12万人の署名を集め実現した。スタート時点から住民の意欲が感じられ、まさに住民のための施設になっていると感じた。

また、近年あまり見かけなくなった井戸も設置され、定期的なイベント開催などにより、子どもに対する防災および環境教育にもなっている。ぜひとも松阪市の避難所になっている公園にも設置してほしいと思った。

としまみどりの防災公園(イケ・サンパーク)は全国で2例目のパークPFI手法による先進事例であるが、大都会におけるファーマーズマーケットの定期開催、KOTO-PORTの設置等、収益事業もいろいろ考えられている。公的施設の管理運営を民間にゆだねることで、行政だけでは成し得ない効果も発揮できていると感じる。豊島区内の他の公園においても区内飲食店による出店を実現し、それぞれの魅力を持つことで、公園を中心とした環境整備が馴染んできている様子であった。

松阪市においても、パークPFI手法を用いて、鈴の森公園、中部台公園にも飲食店等を設置し、幅広く利便性を高めるなど、収益事業を実施するよう提言していきたい。

(文責:濱口 高志)



令和 6 年 5 月 30 日(木)

## 2. 株式会社モンベルとの連携とアウトドア観光施策推進

ご対応者:美郷町 商工観光交流課 交流・商工班 班長 鈴木紀和 様  
美郷町 商工観光交流課 交流・商工班 主査 田口浩之 様

### 1. 秋田県美里町について

#### 概要

人口 17,649 人 総面積 168.32km<sup>2</sup>  
郡南東部の千畑町、六郷町、仙南村の3町村合併により、  
2004年(平成16年)11月1日に発足した。

#### 地理

横手盆地の東部にあり、東側は奥羽山脈の山々が連なる。  
丸子川やその支流が形成する六郷扇状地・千屋扇状地に位置し、町内各所で地下水が自噴する。とくに六郷扇状地扇端部は美郷町六郷として「水の郷百選」に選定されている。  
山: 黒森山、真昼岳 河川: 出川、丸子川、善知鳥川、厨川、七滝川 湖沼: 湯尻ダム、金沢ダム



## 2. 株式会社モンベルとの連携について

### (1)これまでの観光振興施策

- ①全国名水100選などの単独活用のみ
- ②通過型観光で、滞在時間は短い

### (2)これからの新たな観光振興施策

- ①滞在時間をより長くする ▷ 観光振興計画
- ②各種ニューツーリズムの活用 ▷ トレッキング・スノーシュー・サイクリング・カヌーなど

### (3)株式会社モンベルとの協定

- ①平成25年 JAL との連携協定 ▷ JAL より株式会社モンベル会長を紹介される
- ②平成31年1月31日 包括連携協定および防災協定を締結  
モンベルのコンサルティングを基に観光振興計画を策定  
観光資源の掘り起しと再定義により、町の新たな魅力の発信と推進  
    《包括連携協定》 アウトドアアクティビティの指導者育成、運営手法、情報発信  
    《防 災 協 定》 平時は備蓄品の購入、災害時はアウトドア用品や食料品等の物資の供給
- ③街が目指す「体験型・滞在型観光の実現」  
令和2年8月27日 秋田県初のモンベル直営店を美郷町に開設

### (4)令和3年3月31日 道の駅美郷リニューアル

リニューアルに伴う推移【別紙資料参照】



### (5)株式会社モンベルと連携した今後の取り組み

山岳に対する問い合わせも増えていることが実感できる。  
真昼山のみでの入込誘客に頼ることでは限界があることから、新たなルートの発信が必要。  
美郷カレッジ(各界の第一線で活躍されている方々を講師に招く町民講座:モンベル主導)



### 3. 質疑応答

#### (1) 協定締結の背景

美郷町観光振興計画にてアウトドア振興を打ち出す  
JAL からモンベルの紹介

#### (2) 過疎債を含む1億円の投入

モンベルへの1億円の補助(過疎債の利用)

実質負担: 3割の3000万円を町から支出

↓

経済効果: 年間1200万円強の道の販売上 増加

直接歳入: 貸付料 約40万円、法人税 約40万円

固定資産税 約130万円 合計約210万円の歳入増(すべて単年度)

その他 : 登山や各種アクティビティなどによる町への観光誘客も増加し、目に見えない効果も◎



#### (3) 美郷町観光振興計画の策定

平成28・29年が転機 (町の資源を活かした観光振興 ▶ 山や川を活用)

アウトドアに振り切るには町の規模もちょうどよかった

当初は「モンベル」はなかった

モンベルに「地域資源の掘り起こし」による観光コンサルティングを依頼した

モンベルのコンサルティングを基に観光振興計画を作ることが目的だった

#### (4) 美郷町観光振興計画策定後の経過

滞在型アクティビティ15ルートを作った

カヌー・カヤックの活用(ため池でカヌー)

※地元の人が当たり前だと思っているモノも「特別なもの」だと教えてくれた

※かんじき(スノーシュー)も意外と人が集まる(地元民にとってはあたりまえ)

#### (5) モンベルに依存しないまちづくり

モンベルとの連携に関しては賛否の「否」がない事業であった

湧水ガイドは町の人だったが、完全ボランティアにより量や質の差もあったため、認定制度を設定し、積極的に町主導によるガイドを育成し、有償とすることでブラッシュアップを図る。

美郷町ネイチャーガイド(山ガイド、カヌー、天体観測、湧水)

#### (6) 「モンベル」直営店の勧誘にあたり

全国的にみても「モンベルショップ」は観光センター等への指定管理者として入り、ショップ併設であることが多いが、美郷町は違う。あくまでも民間投資としての誘致。

道の駅以外の受け入れ施設の整備は(観光振興計画に記載)

登山道の整備(登山協会からの提言)/登山道に距離柱を整備/登山届の義務

町資産としてカヌー・カヤックの購入 など

#### 4. 所感

株式会社モンベルの出店は、近年、多くの地域で見られるようになってきたが、あくまで指定管理によるものばかりであるという。行政が必要な箱を作り、そこに出店を依頼する仕組みである。当然、出店者にはリスクが少なく、上げ膳据え膳での出店となるが、直営店では訳が違う。行政側も、事前に様々な面での経費支出はあるが、現在においてもその費用対効果は絶大で、事前に支出した経費はすでにほぼ回収も終わっているくらいである。株式会社モンベル側にとっても、出店の際の基本的な地域連携や地元 PR など、様々な面で自治体のバックアップがみられた上、色々な情報収集も可能である。まさにウィンウィンの形である。

美郷町と株式会社モンベルとの連携は、初めから株式会社モンベル直営店の出店ありきで話が進んでいたわけではなく、美郷町が観光振興計画の策定にあたり、株式会社モンベルに計画のコンサルティングを依頼するというところから始まった。

美郷町は、モンベルとのコンサルティングの中で、観光振興計画において「アウトドア」を全面的に押し出していくことを第一に、株式会社モンベルに頼り切らず地元の資源を活用していくことを目指していた。そこからお互いにとって様々なプラスの相乗効果がみえてくることになり、最終的には、トップセールスが功を奏し、東北地方初の直営店のオープンとなった。



林業・農作業用の商品

美郷町における今回の視察は、松阪市における「飯高道の駅」や「香肌イレブン」に関する観光施策に近いものを感じる。元来の美郷町の課題も、カヌーやカヤック、サイクリングに登山などのアウトドアアクティビティのルート整備、アウトドアユーザーへの PR、町民へのアウトドア文化の浸透、ツアーガイドやインストラクターを含めた人材不足と育成など、どこかで聞いたことのある、重なる部分の多い課題である。

しかし、松阪市と美郷町の大きな違いは、自分たちがおこなうサウンディングに並行して、株式会社モンベルのコンサルティングから始まっていることであろう。アウトドアのプロの目線もいれていること。重要な第一歩であったと思う。コンサルティングをアウトソーシングすることは、安易に様々な声があがってくるのが考えられるが、地域資源の活用と人材の育成をベースに置いた、実に見事なコンサルティングとマネジメントがそこにはあったと思う。

松阪市の計画もアウトドア的要素をたくさん持った事業計画であるように見受けられるが、そこにアウトドア的目線が感じられないのはなぜであろう。これからも注視していきたい。



他店にはあまり見かけない作業着系の在庫が豊富

(文責:野呂 一平)

### 3. 盛岡市動物公園 ZOOMO の民間委託とフリースクール設置

ご対応者:株式会社 もりおかパークマネジメント 企画営業広報 森 敦子 様  
みんなのまなびば ぐるぐるの森 代表 山内 まどか 様

#### 1. 盛岡市について

##### 概要

人口 278,811 人 (2024 年) 岩手県の県庁所在地で、中核市。  
安土桃山時代に勢力を広げた南部氏が盛岡城を築いて以後、城下町として発展。東北地方の経済、文化をリードするポジションでもある。また「銀河のしずく」や「ひとめぼれ」などの水稲、野菜、りんごをはじめとする果樹など幅広く多種多様な農産物を生産している。2023 年、米紙ニューヨーク・タイムズで「2023 年に行くべき 52 カ所」の旅行先選ばれた。

##### 地理

岩手県内陸部、北上盆地のほぼ中央部に位置する。面積 886.47 km<sup>2</sup>で、東京 23 区の 1.4 倍に相当し、豊かな自然環境に恵まれ美しい景観を形成している。

#### 2. ZOOMO について

岩手県盛岡市動物公園 ZOOMO は「人と動物と自然が共生する動物公園」をコンセプトに、生物の多様な生き方や関係を伝える社会教育施設としてでなく、動物たちを身近に感じたり、自然を楽しんだり、様々な過ごし方で日常的に利用できる公園である。

現在飼育をしている 60 種 300 頭羽の動物に配慮した飼育展示を心がけ、動物らしい行動や暮らしが発見できる飼育環境の多様さと選択肢を提供。動物の健康状態を科学的に検証し、より質の高い獣医療を行うため、大学等の外部機関と連携をするとともに、動物たちの負担を最小限にしながら、治療と日々のケアを行っている。



##### ● 盛岡市動物公園ZOOMOの歩み

盛岡市動物公園は、盛岡市が出資する財団法人盛岡市動物公園公社が管理運営団体となって平成元年 4 月に開園。開園から約 4 年後の平成 5 年には累計 100 万人、平成 28 年には 500 万人の来園を達成するが、年を追うごとに、施設の老朽化や盛岡市広域圏の人口減少、レジャーの多様化などが影響し来園者は減少。また、人件費が増え続けるなど市の財政負担は増加。この事態に対応すべく、民間活力と民間資本を導入して、動物公園の経営改善を目指すことを決断し、令和元年度末で校舎を解散。人、動物、環境(生態系)の健康は相互に関連していて、1 つであるという考え方、「one world one health」を理念に掲げ、令和 2 年 4 月より新たに「株式会社もりおかパークマネジメント」による「盛岡市動物公園ZOOMO」として再スタート。令和 5 年の来場者は約 20 万人。

### 3. みんなのまなびば ぐるぐるの森について

「学校に行っても行っていないなくても生きていける力をつけたい」

この思いから令和 6 年 4 月、動物園ZOOMO内に、全国初の動物園内フリースクール「ぐるぐるの森」を開校させた。オンライン教材「デキタス」による学習と共に、ZOOMOと連携したイベント企画を展開している。教室は無く、園入り口近くの屋外施設で屋根がある「展望休憩所スペース」(125㎡)を利用。ZOOMO を運営する「もりおかパークマネジメント」が社会課題の解決に連携して取り組む事業者を公募し、書類審査などを経て運営が始まった。



ZOOMO 店内の様子

国や県からの補助金は一切無いがチャンス・フォー・チルドレン(経済的困難を抱える家庭の子どもたちに、学習塾や習い事、体験活動等で利用できるクーポンを提供し、子どもたちの学びを支えている公益社団法人。東京、仙台、兵庫県西宮に事務所を持つ。個人・企業・団体からの寄附で運営)のクーポンを利用している生徒はいる。

利用料は小学生が月28,380円、中学生は月35,000円が上限。

**Vision** 誰もが自分を生きる幸せに包まれ 地域を潤せる社会を目指します

**Mission** ・幸せの感覚を育む(心と身体の居場所づくり)

・社会との繋がりを育む(いろいろな人と関わっていく)

・地域の愛を育む(地域に情報発信をして多様な学び方の理解を深める)

#### 特徴

- ・キャリア教育特化スクール
- ・教育機関との連携必須(学校と家庭の橋渡し役)
- ・企業と連携(本気のお仕事体験。地域の企業を知り、企業も若者を知る)
- ・プログラミングスクール併設(STEAM教育のステモン教室)
- ・大人や一般の子供に向けたプログラムも実施

#### 今後の取組予定

・学習支援・親支援

与えられた場所、物で学ぶのではなく、自分たちの居場所を物理的に作ることに取り組みたい

・子どもの貧困対策事業

子ども食堂、食料等支援事業

・大学生の居場所支援

盛岡近郊で学ぶ大学生に盛岡に愛着をもってもらうため

・大人の遊び場の提供(社会起業家育成支援)

社会起業家＝解決される社会問題の数と考え岩手のソーシャルビジネスのプラットフォームをつくる



## 4. 質疑応答

### ①動物園内に開校する意図や効果は？

閉鎖的でない森の中で過ごすことは人間らしさを取り戻す多くの学びを得られる。また直ぐそばで様々な仕事をする大人を見ること、関わるができることは唯一無二の場所である。動物好きがきっかけで家から外に出るきっかけにもなった。

### ②在校生の居住地は？

現在 5 名が登録。うち 4 名が市内、1 名は隣町から。

### ③市教委や一般校、幼保こども園との関わりは？

新しい生徒が入ったタイミングで市教委に連絡、情報交換をして一緒に子どもを支えている。その後も在籍校に月ごとに報告。特に受験期は密に連携している。幼保こども園との関わりは特に無し。



### ④動物園の動物との関わりは？

動物との関わりの効果は直ぐにあらわれないが、癒やしにつながっているのは確かだと思う。午前中の勉強をちゃんとするとご褒美に、午後の自由時間は園内を散策できる。動物や昆虫とふれあうことを楽しみにしている子どももいる。

### ⑤在校生の数もまだ十分でなく、補助金もないということで、経営的には厳しいのでは？

現状は赤字だが、あと数名生徒が増えれば収支均衡を図れる。代表の別事業等での収入を充てることで、運営費を賄っている。補助金目当てのフリースクール等が増える昨今の事情には憤慨しており、また、補助金等により運営手法等に制約をかけられることも不本意であるため、今後も公的資金の投入には反対である。メディアに取り上げられることも増え、今回の視察などの受け入れも含め、対外的に露出していくことで、世間の評価も入学希望者も増えていくと見込んでいる。

## 所感

盛岡駅から車で15分ほどの丘陵地を登ったところに、フリースクールが併設される国内初の動物園「ZOOMO」があった。生憎の雨の中、大きな駐車場には小学生や親子連れの園児を乗せたバスが並んでいた。園内入り口にある事務所はグッズショップや売店も併設されており、その施設でZOOMOやぐるぐるの森の説明を受けた。

ZOOMOがいかに園内の動植物を大切にしながら運営しているのか聞いた。人件費などの工面も大変なことからSNSで動物の生活や生まれた赤ちゃんの事をUPしていたが入園者の増加には繋がらなかった。そんな時、動物の怪我や病気など悲しいお知らせをしたところ賛否が寄せられSNSで炎上した。しかし、そのことがきっかけで飼育員や動物への応援メッセージが増え、入園者増加に繋がった。園内の事務所施設には、動物たちに関連したグッズショップや障がい者たちが運営する軽食コーナーもあり暖かい雰囲気施設の施設であった。

ぐるぐるの森 山内代表は、「動物園ZOOMOは動物の未来と不登校の子ども達の未来をつくっている」と言われた。動物とふれあい、動物を育てる人達とふれあい、動物園に来た人とふれあう。子ども達は動物の世話や森林整備などにも参加しているらしい。人手不足の園側からみれば子ども達のマンパワーは大変ありがたい。また来園者の響き渡る声も、子ども達には刺激になっているのだろう。様々な人が居て様々な視点があることを学び、今後は来園した高齢者を車椅子で案内するサービスも考えているらしい。人が喜ぶ姿はきっと子ども達を成長させてくれると思う。



全国的に増加している不登校児の数。岩手県でも平成 30 年の 1263 人から、令和 4 年の間に 2005 人およそ 1.6 倍に増加している。松阪市においても不登校児は増加している。多様性が認められつつあるいま、子ども達の学びの仕方は多種多様でいいのではないかと思う。教室で先生や友達から学ぶことは楽しい大切なことであるが、それだけが学びでは無い。長い人生どんな学校で学ぶのかより、どうやって社会で生き抜いていくかが大切だと思う。エネルギッシュな、ぐるぐるの森

山内代表の「子ども達が動物園で働くことは、生きていくことの手法を学ぶ」「もっと社会が学校に行けない子ども達の事を理解してあげて欲しい」という言葉は、不登校児を取り巻く現実なんだと考えさせられたし、この言葉は鋭く突き刺さった。松阪市内にもフリースクールがあるが、市教委との連携、保護者との連携で不登校の子ども達の生きる手法を見つけたいと強く願う。

文責：赤塚かおり

今回の 3 か所の視察は、パーク PFI、民間企業との包括連携と店舗誘致、指定管理者制度活用と企業間連携という、3 か所とも公共サービスや福祉の増進における民間活力の活用事例である。もはや、既存の行政による行政サービスではまかないきれない、現代の多種多様なニーズに応えるためには、いかにして民間の企業や事業者の方々との連携し、担い手として託していけるかこそが最重要課題だと思う。よくあるコストカットや合理化だけを目的とする民間委託ではなく、専門性を持った民間事業者の方々に託していくことで、行政が得意なこと、民間が得意なことを分担し、より良い公共サービスを作り上げていかななくてはならない。安かろう悪かろうとなっては本末転倒であり、コスト軽減は副産物で良いのではないかと思うのだ。仮に、市内に優れた専門性が乏しかったとすれば、全国各地のトップランナーとタッグを組む中で、市内事業者の方々ともジョイントし、互いに磨き上げていけばよい。組織もまちづくりも、新しい風を送り込まなければどんよりとしてしまう。常に変化し続ける必要はないが、変化を恐れていては次世代に街を残すことも困難となる。巷では消滅可能性都市の話題が定期的に上がるが、若い世代やこれからの未来を生きる子どもたちが、帰って来なくなる街、住み続けたい街として選んでくれなければ、松阪市も他人事ではないのだ。若者や子育て世代にアピールできるような、政策や事業展開を突き詰めていかななくてはならないと、再認識した。

編集：沖 和哉